

道ばたにいた男

アルバート・マルツ 著
坂 本 肇 訳

午後4時ころ、ぼくは、ウェストバージニア州のゴーリーの橋を車でとおった。急カーブを切りながら鉄橋の下のトンネルに入っていった。この道はまえに一度とおったことがあって、中のようすはわかっていた——トンネルに入るときに、ぼくは時速十マイルに車のスピードを落としていた。けれど、そのスピードでもあぶなく人をひくところだった。こんなことは初めての体験だったが、事の起こりはこういうことだ。

ところどころに碎石を敷き詰めた道路は、朝から降りつづいた雨でびしょぬれになっていた。それで氷のようにスリップしやすかった。おまけにとても暗かった——まっ暗な空と、たえまなく吹きつける雨で、ヘッドライトを点けないと運転できなかった。トンネルに入ったとたん、ベージュ色の大形トラックが向こう側のカーブを急スピードで曲がってきた。カーブがとても急だったので、トラックのヘッドライトはぼくの目にとまらなかった。トンネルの中は、とても狭かった。車がやっとすれちがうくらいのスペースしかなかった。はっとする間もなく、トラックの大きな前輪がこちらの車線に出てきた。

ぼくは急ブレーキをかけた。時速十マイルでも車はスリップした。最初は、トラックのほうへスリップした。ハンドルをぐいと切った。すると、車は内側の壁のほうへスリップした。そして止まった。トラックは急角度で曲がって、ぼくの車のバンパーをこすった。トラックがトンネルを抜けたとき、ぼくとは一インチくらいしか離れていなかった。若い男が緊張した顔で、トラックを運転しているのがはっきり見えた。かみ煙草をほおぼったまま、視線が道路に釘づけになっていた。かみ煙草を喉につまらせてくたばっちまえ。ぼくは思わず

そういった。それを今でも覚えている。

ぼくは車を発車させて、ギヤをいれかえた。車の前方に男がいるのに気づいたのはそのときだった。車輪から一フィートの近さだった。一瞬、どきっとした。「しまった」とぼくは口走った。

とっさに思ったのは、ぼくが車を止めたあと、その男がトンネルに入ってきたのだということだった。ずっと前からそこにいたわけではないと思った。それからよく見ると、男はぼくのほうからは横向きに立っていて、ヒッチハイカーの手ぶりよろしく片手を上にあげている。もしもトンネルへ歩いて入ってきたのなら、こちらを向いていることになる——向かい側の壁面を見るようにして、横向きに立っているはずはなかった。明らかに、ぼくはすんでのことでその男をひきたおすところだった。男はなにも気づいていなかった。ぼくの車がいることも知らなかったのだ。

ぼくの中で、すうっと力がぬけた。頭の中に、車輪の下で男がぺちゃんこになっているようすが浮かんた。男をひいたのに気づいて、そばに突ったまままでいるぼくの姿が浮かんた。

ぼくは「おいっ！」と声をかけた。男は答えなかった。声を大きくして呼んだ。男は顔を向けようとしなかった。じっと立ったまま、手を宙にあげて、親指を上突きだしている。ぼくは怖くなった。短編作家ビアスの書いた怪奇物語のように、男の亡霊がどこからともなく現われ、うす暗い田舎道にひとりたたずんでいるみたいだった。

ぼくの車のクラクションは性能がよく、耳ざわりなくらい大きな音を出す。トンネルの中なら、音は何倍にもなるだろう。ぼくは手のひらでクラクションの小さな黒いボタンを叩いて、できるだけ強く押した。男はびっくりして跳びあがるだろう。でないと、亡霊ということになる。

いや、彼は亡霊ではなかった——だけど、跳びあがりもしなかった。それは耳が遠いからではなかった。クラクションはちゃんと聞こえていた。

男はぐっすりと眠っている人のようだった。クラクションが、おもむろに彼

を眠りから呼び覚ましていくように思われた。まるで意識がすっかり内面の奥深く沈みこんでいたのを呼び覚ますようだった。彼はゆっくりと顔を向けてぼくを見た。年のころは三十五くらい、大柄な男で、浮かぬ顔をしていた——大きく肉づきのいい鼻、それに大きな口をした、ありきたりの顔だちだった。その表情からはたいしてわからなかった。柔和なとも、粗暴なとも、かといって知的なとも、愚鈍なともいえない顔だちだった。雨に濡れた大男が、膜を被ったような眼でぼくを見ている、ただそれだけの顔だった。男の目つきを別にすると、そのような顔は朝の六時に坑内に入って行く男たちとか、製鉄所などで重労働をして出てくる男たちの間でよく見受ける顔だ。ぼくにわからなかったのは、膜を被ったような男の眼だった。それは酔っぱらいのとろんとした眼ではなかった。いつだったか、ある女の人が発作を起こして暴れたことがある。その眼はぎらぎらと狂暴な色にみちていたが、この男の眼はそれとも違っていた。わずかに思い当たるのは、ぼくの知りあいで癌で死んだ男のことだった。死期の迫ったその知人の眼にも、これと同じようにどんよりとした膜がかかっていた。遠くを見るような虚ろな眼になっていたが、ちょうど表側にはなにも写っていないフィルムの裏側で、ひそかに過去のできごとがづぎづぎに写しだされ、心はそれに集中しているような表情だった。いま道ばたにいる男の眼にそれと同じ色が見えるのだった。

ようやくぼくの鳴らしたクラクションを耳にして、男はゆっくりと車の前をまわって運転席のほうへきた。あわやというところまでぼくの車が接近していたので、いくらなんでもびっくりした顔ぐらいしているだろう、とぼくは思った。けれど、男にはなんの感情の変化もなかった。ゆっくりと、落ちついた足どりで歩いてきた。まるでぼくのくるのを待っていたようだ。男は、頭をかがめると車の中をのぞいて、「乗ってくれんかいね、あんた?」といった。

馬の歯のように大きな歯ならびが見えた。先端がすり減った歯は、煙草のヤニで黄色になっている。声は甲高く、鼻にかかって、深南部の人に特有のゆっくりした話しぶりなので、間延びして聞こえた。ウェストバージニアでも、町

なかでこんな言い方をする人はほとんどいないようだ。山育ちだな、とぼくは思った。

ぼくは、その男の服装を見た——古ぼけた帽子、新しいブルーの作業着、それに黒っぽいズボンが雨でびしょり濡れている。とりたてて変わったところもない。

ほんのすこしの時間だが、ぼくは男の素性に気をとられていたらしい。男がまた聞いた。「わしゃあ、ウエストーンに行くもんで。あんたさんもそっちのほうへ行きなさるんで？」

男がしゃべっているときに、ぼくはその目をじっと見た。さっきの膜は消えて、いまは普通の目になっていた。茶色のうるんだ目だった。

ぼくはどう返事したものかわからなかった。ほんとは乗せたくなかった——人をひきそうになったことで、内心うろたえていたのだ。早くトンネルを出たかった。この男からも離れてしまいたかった。だが、男はじっと、へりくだったような態度でぼくを見ている。雨が縞になって顔から垂れていた。車に乗せてくれと頼んで、男はただ一心にぼくの答えを待っている。ぼくは気が引けてきて、「だめだ」とはいえなかった。それに好奇心もあった。「乗ってもいいよ」とぼくはいった。

彼は助手席に座り、茶色の紙袋をひざのうえにおいた。ぼくたちはトンネルから出た。

ゴリーからウエストーンまでおよそ百マイルあるが、これがすこぶる険しい山道で——五マイル登って山頂へ出ると、こんどは五マイルの下り坂。と思うと、また登りである。道は、のたくりまわる蛇のように七曲り八曲り、一方にはたいてい絶壁がそそりたち、反対側は千フィートかそれ以上もの溪谷になっている。雨は降るし、山の斜面からは小石が崩れ落ちて道路に散らばるので、車を徐行しなければならなかった。ところが四時間かそこらかかった車中で、ぼくが同乗させた男はほんのすこしか口をきかなかった。

ぼくは何度かしゃべらせようとした。男はしゃべりたくないというより、ぼ

く言葉が耳にはいらぬようすだった——口をきくと、内面に秘めた奈落の底に落ちてしまうかのようだった。モルヒネ注射でもうろうとなった人間のよう座っている。ぼくの会話も、おんぼろ車のがたがたいう音も、降りしきる雨の音も、みんな遠くで聞こえるざわめきだった——それは意味のない外部の世界だった。殻を作って、その中で生きてるように思われる男の内部にはいることなどできなかった。

車をスタートさせてからすぐ、ぼくは男に、どれくらいトンネルの中にいたのかと尋ねた。

「そうさねえ」と男は答えた。「ずいぶんと居た気もするだよ」

「どうしてあんなところに立っていたの。雨宿りでもしていたの？」

男は黙っていた。ぼくは大声をだしてまた尋ねた。すると顔をこちらに向けてこういった。「すまねえです。なんか言いなすったかいの？」

「ええ。あのトンネルの中で、ぼくがもう少しであんたをひいてしまうところだったのを知ってる？」

「ちいっとも」。男はいかにも山育ちらしい言葉づかいでそういった。

「ぼくが大声を出したのが聞こえなかつたんですかね」

「ちいっとも」といって、男は一息ついた。「わしゃあ、考えごとさしたもんで」

「考えごとさ、したもんで、か」とぼくは心の中で彼の言葉をくりかえした。そして「どうかしたの、耳でも遠いのかね」ときいてみた。

「ちいっとも」。そういうと男は顔をそらして、ずっと前方の道のほうへ目をやった。

ぼくは追っかけるように話しかけた。黙りこまれたくなかつた。何とかしゃべっていてもらいたかつた。

「職探しかね？」

「そうなんで」

男は口をきくのもやつのように見えた。言葉づかいに障害があるというわ

けではなかった。その心中に、口をきこうとする気持ちの中に、何かわだかまりがあった。まるで彼には、彼の世界とぼくの世界とをつなぐことができないみたいだった。けれど返事をするぶんには、ひまはかけないし話のつじつまもあっていて。これをどう判断したらよいのか、ぼくにはわからなかった。彼が車の中に乗りこんできたとき、ちょっと怖かった。いまはただ、すごく好奇心をそそられ、すこし後悔の気持ちがあるだけだった。

「商売でもしているの？」ぼくはこの質問を思いついてうれしくなった。人がどんな仕事についているかで、その人間のことがたいていわかるからだ。そのあとの会話もしやすくなるというものだ。

「わしゃあ、たいがいヤマで仕事さしてるんで」と男はいった。

「さあ、これで何とかなるぞ」とぼくは思った。

ところが、ちょうどそのとき道路の舗装が切れて、それから先はぬかるみに轍のあとが深くついていて、車を走らせにくい。ぼくは話すのを止めて運転に注意を集中しなければならなかった。ふたたび舗装した道路に出たとき、話の手がかりがなくなっていた。

もう一度ぼくは男に口をきかせようとした。それはむだだった。ぼくのいうことさえ耳にいれていないのだ。男が黙っているの、とうとうぼくのほうがかたじけなく、恥ずかしくなった。彼はどこか心の内に沈んでいて、ただ一人にしておいてくれといっている。ぼくはその内面に立ちいるのは悪いと思った。

こうして四時間ほど黙ったまま車を走らせた。ぼくにとってこの四時間はほとんど耐えがたいものだった。人間のこのような頑なさをぼくは一度も見たことがない。男は背筋をのばして座っている。外の眼は前方の道路に注がれているが、内なる眼はなにも見ていない。車の中にぼくがいることも意識していないし、自分が車に乗っていることも意識していない。わきのカーテンの隙間から吹きつける雨のしぶきも感じていない。岩から型どった石板のように座っている。わずかにその息づかいから、男が生きているのを確かめることができるだけだ。男の息づかいは重苦しかった。

この長い車の中で一度だけ彼は姿勢をかえた。それは急に咳こんだときだった。はげしい空咳で、大きな身体を右に左に揺すり、百日咳にかかった子供のように上半身をくの字に折りまげた。咳をして何か吐き出そうとしていた——胸の中で痰の音がした——が、うまく吐きだせない。身体の内部で、冷たい金属を肋骨にこすりつけているような、不快な音がかすれるようにする。男はつばを吐き、頭を振りつづけた。

発作がおさまるのに三分くらいかかった。それから彼はぼくのほうへ顔を向けて、「どうもすまねえです」といった。それだけだった。あとはまた黙ってしまった。

ぼくは恐ろしくなった。何度も車を止めて、彼に降りてもらおうと思った。旅行を打ちきるもつともな口実をあれこれ考えた。けれど、それは切りだせなかった。この男はどこが悪いだろうか。ぼくはそれを知りたい好奇心にかられた。別れる前に、ひょっとして車から降りるときにでも、どこが悪いとはつきりいうか、それとなくいうかしてくれないだろうか。

男の咳こみようから肺結核ではないかなという気がした。ぼくは、前に見たことのある睡眠病患者のこと、パンチを浴びておかしくなったボクサーのことも考えてみた。けれど、どれも当てはまりそうになかった。なにもいわず、おそろしいまでに沈黙をまもる。ひとを寄せつけず、ひたすら自分の中へ閉じこもる。このようなことは、肉体的なことからは説明がつきそうになかった。

雨と闇の一時間がすぎ、さらに一時間がすぎた。

車は、鉾山のスレート捨て場のそばをとおりすぎた。雨のため、その表面から炎がパッと燃えだしていた。黒いスレートのぼた山の上に、青と赤の炎がちらちらと鬼火のようにゆらめいているのが、同乗している男の気を引いたらしかった。彼は首をまわして、その炎を見ていたが何もいわなかった。ぼくも黙っていた。

そして、またも沈黙と雨。ところどころに荒涼としたぼた山があった。冷氣の中を漂う煙の臭いが鼻につき、炭坑夫が住んでいる、壊れかけた小屋にとも

る石油ランプの灯りが眼にとまった。それからまた黒ぐろとした道になり、大きくて形もさだかでない山また山がつづいた。

八時ころウェストンに着いた。ぼくは疲れて寒気がした。腹もすいていた。コーヒーショップの前で車を止めて、男のほうへ顔を向けた。

「やあ、ここですかい」と彼がいった。

「そう」とぼくはいったが、びっくりした。ウェストンに着いたのを彼が知っているとは思ってもいなかったからだ。どうせこれっきりだし、ぼくは思いきって声をかけた。「ちょっとコーヒーでも飲みますか」

「はあ、どうもありがとさんで」と彼は答えた。

この「ありがとさんで」という返事でおよその事情がわかった。その口ぶりからすると、コーヒーは飲みたいがお金がないのだ。ぼくが誘ったのを親切心からと受けとって、もっけの幸いと思っているらしい。誘ってよかった、とぼくは思った。

ぼくたちは店へ入った。トンネルで出会ってからこのとき初めて、彼は人間らしい顔つきを見せた。口こそきかなかつたが、自分の中へ閉じこもりもしなかつた。カウンターに腰かけてコーヒーがくるのを待っている。コーヒーがくると、彼は手を暖めるようにカップを両手で抱えてゆっくりと飲んだ。

彼がコーヒーを飲んでしまうと、ぼくはサンドイッチはどうだときいた。男は顔を向けるとほほ笑んだ。とても穏やかな、いかにもしんぼう強い微笑だった。大きな鈍重な顔が明るくなり、思いやりのある、やさしい、穏やかな顔になるように見えた。

その微笑を見てぼくはすごく動揺した。人をなごやかにする微笑ではなかつた——気持ちの悪くなるような微笑だった。死体がそろっと動きはじめるのを見ている気持ちがした。ぼくは声をあげていいたかつた。「ああ、かわいそうに！」と。

男が話しかけてきた。顔には微笑が浮かんだままで、大きな馬のような歯が煙草のヤニで黄色になっているのが見えた。

「ほんに親切にしてもろうてありがとさんで。わしゃあ、なんてお礼をいうたらいいやら」

ぼくは口ごもりながら、「なあに、そんなこといいですよ」といった。

男はじっとこちらを見ていた。何かいいたそうにしている。ぼくにはそれがこわかった。

「お頼みしたいことがあるんだけどもよ？」

「いいですよ」

男は静かな声でこういった。「わしゃあ、うちの女房に手紙を書いたんだけど、あんじょう書けねえだ。すまねえことですが、書きなおしてもらえますかいの？読めんようだと困るもんで」

「ええ、いいですとも」とぼくはいった。

「あんたさんなら手紙の書き方、あんじょうご存じで。わしにゃあ、わかりますだ」といって男はほほ笑んだ。

「そうですか」

男はブルーのシャツをはだけた。厚いウールの下着に安全ピンで止めた紙きれがあった。彼はそれをぼくに渡した。紙きれは湿ってなま温かった。濡れた衣服の湿っぽい臭いにまじって、かすかにすえた体臭がしみついてた。

ぼくは店のウェイターに紙をくれと頼んで、紙を一枚もらった。つぎの手紙はぼくが書き写したものである。ここには、男の書いたままに写しておく。

しんあいなる女房へ――

わしゃあ、うちを出るまえにお前にいわなかったこと、いおうと思うて、今、この手がみ、書いている。わしゃあ、わけあってヤマで仕事できない。お前には不ケイ気だからというたけど、じつはそうじゃねえ。

もうせんにヤマ閉じたことあった。だもんで、わしゃあ、ゴーリーの橋のちかくのトンネルで仕事さ、した。そこんとこで会社が川の水を山なかへ引いている。そんなときからわけがある。ヤマの親かた、あんトン

ネルで仕事したもんは雇わんでいうた。

わしらが穴あけた岩ころになんもかんもわけがある。あん岩ころはシリカというて、まあガラスみたいなもんだど。あんトンネルで仕事したもん、そんガラスの粉末、息するときに肺んなかへみんな吸うてしもうた。だもんで、わしらみんな、病気になった。お医しゃがわしに書いてくれた。シリコシスっていう病気だとよ。そんなめ肺んなかにかさぶたできて息できんくなる。

わしのうち、ぎょうさん町からはなれとるんで、お前、トム・プレスコットとハンシー・マッカロのやつが、二日まえに死んでしもうたこと知るまい。だけんど、わししゃあ、これ聞いてお医しゃのとこいった。

お医しゃがいうにゃ、わしもトム・プレスコットやつとおんなし病気にかかるとるんだとよ。だもんで、おりおりにせきが出るんだとよ。わしの肺にゃ、かさぶたができとる。トンネルでこの死の病気にかかったもん、みんなして百人よりか、もっとたくさんいる。おそろしい伝せん病だとよ。お医しゃがいうにゃ、会社がわしらにマスクくれて、トンネルさちゃんとした換キの仕かけをつけりゃ、こんな病気ないんだとよ。

お医しゃがいうにゃ、わしのいのち、あと四ヵ月だとよ。だもんで、わししゃあ、どっか遠くへいこうと思うとる。

どっかよそれでも仕事はあると、わししゃあ、あん気にかんがえとる。仕事できんくなるまで、かせいだぜニみんなおくる。

うちでお前たちに迷惑かけたくない。そう思うた。だもんで、わししゃあ、うちをでた。

わしの便りきれたら、山んなかのキルニー・ランのばあちゃんとこさ行くがええ。そこで暮らせ。ばあちゃん、お前と子どもの面どうみてくれる。

たっしやでいてくれ。ぼうずはヤマにちかづけちゃなんねえ。そこで仕事させちゃなんねえ。

わしがうち出たからいうて、くよくよしちゃんねえぞ。気分こわしちゃんねえぞ。ぼうず、大きくなったら、会社がわしにしたこと話してやってくれ。

もうじきしたら、お前、だれかいいむこさん見つけるがええ。お前はまだ若い。

あいする亭しゅ、
ジャック・ピケット。

ぼくがこの手紙を書きなおして渡すと、男は書きだしから結びまで読みとおした。長いことかかった。ようやくそれをたたむと、安全ピンで下着のシャツに止めた。大きな鈍重な顔はやさしそうで、穏やかだった。「ほんにありがとさんで」と男はいった。それからうなだれるようにして、とても静かな口調でこういった——「わしゃあ、こんなことなつてなさけねえと思つとるだ。女房はほんにできたおなごじゃった」。そこで言葉を切った。それからまるで独り言のように、聞きとれないほどの小さな声で、「わしゃあ、しんそこなさけねえんで」といった。

そういう男の顔をぼくはじっと見た。男の眼から、ゆっくりと生氣が消えていく。夜の闇に消えていくキャンドルの灯りのように、それはしだいに眼の奥へ退いていくようだった。あのどんよりした膜が、眼球の表面にふたたびかかってくる。男はぼくとは別の世界の人になっていた。男は悲しい、暗い思いに閉ざされて、自分の心の奥深く沈みこんでしまった。

それで終わりだった。ぼくたちは並んで座っていた。ぼくの中には、言葉にあらわせない感情があった——この男によせる憐れみと慈しみ、この男を殺したものにたいする深く激しい憎しみが。

やがて男は立ちあがった。何もいわなかった。ぼくも黙っていた。男が出口のほうへ歩いていくとき、ぼくは、ブルーの作業服をまとったその大きさが、つちりした後ろ姿を見ていた。男は暗やみと雨の中へ出ていった。

短編作家としてのアルバート・マルツ

— 訳者あとがき —

坂 本 肇

1930年代のアメリカ「合州国」は世界史的な大恐慌にみまわれ、おおくの知識人・作家が社会主義に関心をよせた。失業と飢餓と貧困の時代を反映するように、左翼文学運動がかつてみられないほど高揚し、階級的な労働者を創作のテーマとする「プロレタリア文学」がつぎつぎに発表された。「プロレタリア文学」の功績の一つは、文学におけるヒーローとして、それまで文学や芸術にかかわることの少なかった労働者層をドラスティックにとりあげたことにあるだろう。そのために労働者を中心とする広範な一般大衆が「プロレタリア文学」のよき読者となり、文学の裾野がいっぺんにひろがった。

本訳の原作者であるアルバート・マルツ(1908-85)は、30年代アメリカ文学史上に時代的なスポットライトをあびて登場した「プロレタリア作家」の一人である。彼の文学は知識人たちのあいだばかりではなく、一般大衆のあいだでもひろく受けいれられた。

マルツの作品としては、1938年にO・ヘンリー賞の第一位にかがやいた短編「世界一の幸せ者」(“The Happiest Man on Earth”)がよく知られている。この短編は、『ハーパーズ・マガジン』誌の38年6月号に発表されてから数年のあいだで、雑誌、新聞、アンソロジーなどにじつに76回も転載されたといわれる⁽¹⁾。マルツの短編が30年代後半に一般読者からいかに歓迎されていたかをうかがわせる一つのデータであるが、「傾向的なプロレタリア作家」として知られるマルツが、短編小説界の流行作家としての地歩を確立していたということでもある。ちなみに、この短編はわが国でも清水俊二、堤浩二、鳴海四郎、岡節三による4種類の翻訳がある⁽²⁾。

1932年、社会派の劇作家としてデビューしたマルツは、2年後の34年にペン

シルベニアからウェストバージニアの炭坑地帯をマイカーで旅行した。20世紀初頭に活躍したマザー・ジョーンズという炭坑労働運動のオルガナイザーの資料を収集して、演劇の脚本を書くつもりだった。その取材旅行の途中で、マルツは自分の車に乗せてやったヒッチハイカーから、ウェストバージニアの坑夫たちが悲惨な職業病に苦しんでいるのを知らされる。ユニオン・カーバイドの子会社に雇われた労働者が、水力用のトンネルを掘る工事中にシリカ(珪石)の粉塵を吸いこんで、シリコシス(珪肺症)にかかってしまったというのである⁽³⁾。会社は現場の作業員にマスクの着用もさせていなかった。珪肺症は治るのがむずかしく、重症にすすみやすい病気である。すでに坑夫たちのあいだから死者がでていた。致命的な職業病がウェストバージニアの山間部に発生していることを知ったマルツは、それをさっそくニューヨークのジャーナリズムに通報するとともに、みずからもドキュメンタリー的な短編にまとめあげ、翌35年、左翼系の文芸雑誌『ニューマセズ』誌の1月8日号に発表した。ここに訳した「道ばたにいた男」(“Man on a Road”)がそれである。

この作品は、これまで演劇の脚本しか書いたことのないマルツにとって、初めて描いたショートフィクションだったが、発表されるとすぐにセンセーションをまきおこした。搾取される労働者階級にシンパシーをよせ、彼らを死に追いやるものを告発したこの短編くらい、アメリカの小説の中で、労働組合の機関紙に数おくりプリントされたものはないといわれる⁽⁴⁾。マルツの描いた珪肺症に苦しむ坑夫の姿は、たんにフィクションの中の人物ととしてではなく、現実に生きる人間として労働者仲間を受けとられた。それも、ただ受動的に受けとられたのではなく、深い感動をもって受けとめられた。それだけではない。鬼面ひとをおどかさようではあるが、マルツの短編は深刻な社会問題として、ときの連邦政府をも動かすような影響力を発揮した。珪肺症の悲惨さにショックを受けた連邦議会では、36年、珪肺症調査委員会を発足させることになったのである⁽⁵⁾。

このあたりに、プロテスト文学としてのマルツ文学の本領をみることができ

るかかもしれないが、マルツの真価を政治的効用性にだけ求めるのは、いうまでもなく偏っている。文学は芸術としてすぐれているものだけが、おそらく人を感動させることができるからである。1935年に『ニューマセズ』誌に発表された「道ばたにいた男」は、同年、「プロレタリア文学」の代表的理論家であるグランビル・ヒックスやマイケル・ゴールドらが編集した『合州国プロレタリア文学選集』に収められ、翌36年には、短編小説の名鑑定家として定評のあるオブライエンのえらんだ『1936年度最優秀短編選集』にとりあげられた。それから3年後、そのオブライエンが、1915年から1939年までに「合州国」内で出版された短編の中から、50編の名作をピックアップしてアンソロジーを編集したが、ヘミングウェイやフォークナーの短編とならんで、そのアンソロジーにも、マルツのこの短編「道ばたにいた男」が収められている。

本訳の底本には、マルツの第二冊目の短編集 *Afternoon in the Jungle: The Selected Short Stories of Albert Maltz* (Liveright, 1971) を使用した。

注

- (1) Victor Navasky, *Naming Names* (Penguin, 1981), p. 334.
- (2) 清水俊二訳「幸福を捉へた男」『改造』(1940年11月)
堤浩二訳「地球上で一番幸福な男」『新日本文学』(1960年8月)
鳴海四郎訳「世界一幸福な男」『世界短篇文学全集14巻〈アメリカ/20世紀〉』(集英社、1977年)
岡節三訳「この世でいちばん幸せな男」『世界短編名作選〈アメリカ編〉』(新日本出版社、1977年)
- (3) Jack Salzman, *Albert Maltz* (Twayne, 1978), p. 11.
Barbara Zheutlin and David Talbot, *Creative Differences* (South End Pr., 1978), p. 25.

道ばたにいた男(アルバート・マルツ著／坂本 肇 訳)

- (4) Michael Gold, "Introduction" to *The Way Things Are and Other Stories* by Albert Maltz (International Publishers, 1938), p. 14.
- (5) *ibid.*, p. 14.